〔書評と紹介〕

『角川日本地名大辞典』２青森県

斉藤利男

一

近年ここ青森県でも、開発の進展と都市化に伴って、私達の生活の場である地域社会は急激な変貌を遂げつつある。そしてまた住民表示近代化の名のもとに、伝統ある地名が次々に消滅させられてきている。すでに昭和四三年、青森市では市中心部の地名の変更がなされたが、それに加えて私達の身近にあった小字地名も、急速に忘れられ消滅しつつあるといってよい。いうまでもなく地名とは、その地の自然のありさまと人々の営みの歴史が刻み込まれたかけがえのないものなのであって、かかる動向に対し旧来の地名を守ろうという運動が起こっているのも、当然の動きといわねばならぬ。

　こうしたとき、昨年十二月、『角川日本地名大辞典』の青森県版が刊行された。約六〇名の研究者による一〇年あまりの努力の成果である。わが青森県でも、最近の地域史研究の発展は文献史学・民俗学・考古学・歴史地理学などを問わずめざましく、この「地名大辞典」は、そうした成果の今日における集大成の意味を持つものといえるだろう。私達はすでに去る一九八二年、平凡社日本歴史地名体系２『青森県の地名』を得ている。それに続く今回の「地名大辞典」の刊行は、我らが住むこの北方の大地とその歴史を認識するうえで、今後大きな役割を果たすに違いない。『角川日本地名大辞典』の特徴は、ミニ県史ともいうべき総説、それに地名編・地誌編・資料編の四部構成になっていることであるが、以下、書評を兼ね内容の紹介を行なおうと思う。ただ中世史専攻という筆者の力量の関係上、偏ったものにならざるを得ないことを、あらかじめお詫びしておきたい。

二

最近の日本史研究に於いて特筆すべきことの一つは、奥羽・蝦夷問題を視野の中心におき東アジア世界全体との関わりに留意する「北方史」研究の目覚ましい発展であった。総説は、こうした成果を広く取り入れてレベルの高いかつわかりやすい県史となっている。なかでも白眉といえるのは（地名編にも共通するものだが）、糠部郡九戸・四門の制についての叙述である。先に服部英雄氏によって紹介された「南部家文書」正平二一年（一三六六）八月十五日の四戸八幡宮神役注文案により、吉田東伍『大日本地名辞書』以来主張されてきた東西南北四つの門の下に九つの戸がおかれたという「通説」の誤りを、完全に明らかにし、九つの戸と四つの門が並列する制度であったことを指摘する。糠部郡は日本中世国家において最大の郡かつ糠部駿馬の産地として、また海峡をこえた北方世界との接点として、特殊な扱いを受けてきた土地であった。その歴史の解明は津軽に比して著しく遅れ、多くの謎を残していたが、こ

れを機に研究の発展が期待できるであろう。また「津軽郡中名字の世界」では「津軽大里」の称・郡中名字の地名・アイヌ語地名についてふれる。「地名辞典」の名にふさわしい叙述である。「東アジア世界における北奥の位置」「蝦夷地との交流」なども興味深い。気になるのは「擦文文化と板碑文化」の項で、わが県の文化圏をこの二つに分け前者を安藤氏に関係づける。だが擦文文化の拡がりは従来いわれていたよりずっと広く、また西海岸には津軽内陸部とは異なるものの質・量ともに豊富な板碑文化が遅くとも一四世紀半ばには存在する。二つの文化圏の対立という図式で中世青森県地域をとらえるのはやや早計ではないか。もう一つ残念なのは、これまでの県通史と同じく近代史の叙述が薄いことであるが、これはわが県における近代史研究の立ち遅れの結果でもあり、私達全体に課せられた課題と言わねばなるまい。

次に地名・地誌編。ここでも近年の「北方史」研究の進展と長年にわたる地道な調査の成果を反映して、優れた叙述が見受けられる。二・三の例をあげれば、まず「かれいざわ　王余魚沢」の項。「かれい」という珍しい地名の由来、つづいて様々の伝承とそれに関係する小字地名、そしてこの地の歴史が、広い地域的視野をもって記されている。「うとうじんじゃ　善知鳥神社」。ここではまず、謡曲「善知鳥」の筋とは異なった現地の善知鳥安方伝説が紹介され、それをふまえて、この地の開発・神社の歴史が明快に述べられる。「うてつ　宇鉄」も同様に密度が濃い。圧巻は新渡戸伝・十次郎父子による有名な三本木開拓に関する叙述である。例えば「いなおいがわ　稲生川」「さんぼんぎ　三本木」あるいは地誌編「十和田市」沿革の項を見よ。以前の研究では必ずしも明らかでなかった稲生川開削工事の経過が、工事を担った技術者集団のことも含め具体的に展開され、また農業開発ではなく実態は都市開発であった三本木開拓の実像、軍馬補充部を核に軍都として発展していった三本木の歴史も見事に解明されている。その結果、これまで支配的であったいわゆる「新渡戸神話」「開拓神話」に事実上修正がせまられるなど、従来の通史や「地名辞典」の類に比して面目を一新したといっても過言ではない。

ただし不満な点も少なくはない。特に気になるのは中世に関する叙述。いくつかの場合を除き中世の部分は〝何文書に次のように見える〟といった記載で終っている。これではその土地の中世の歴史は何もわからないのではないか。それでも古文書に名が記されているところはまだよい。そうでなければ記述は近世から始まるわけである。だがそうした土地でも、多くは古代・中世からの歴史を持っていることについては、だれしも異論はないだろう。問題は単に中世だけにとどまるものでなく、地名研究の方法にある。古文書がなければ伝承・遺跡・寺社の縁起など、さらには地名そのものの由来からも迫ることは出来るであろう。古くは柳田國男の仕事があり、近年の中世史研究はこうした文献以外の手法をも駆使してめざましい成果をあげているのである。また青森県の原始・古代史を語るに避けることのできないアイヌ語地名についても、山田秀三氏の優れた研究が三年前に公にされている。残念ながら地名編の叙述が、必ずしもこうした成果を受けとめていないことを指摘せねばならぬ。

例えば中山という地名。黒田日出男氏によれば、これは「古代以来の民衆の交通・交易活動の発展によって生み出された境界地名である」と

いう（「中山ー中世の交通と境界地名ー」『月刊百科』二四四）。青森県でも中山山脈・中山峠などその例は少なくない。また大鰐の北には宿川原という集落がある。これについても網野善彦氏などの指摘があり、「宿河原」「河原宿」とは中世の都市的な場に特有の地名であったことが、明らかになっている（「地名と中世史研究」『中世再考』）。岩木山麓にある弘前市中別所には鎌倉時代からの板碑が多数林立し、その地の特有な宗教的歴史を推測させるが、「別所」とは実は僧侶が本寺を離れて宗教生活を営む施設を意味する言葉であった。さらに同じく弘前市内にある「さんびない　小比内」。山田秀三氏によれば、もとはアイヌ語のサッピナイで〝乾いて石がゴロゴロしている川〟という意味だという（『アイヌ語地名の研究』）。こうしたことを踏まえ、まさに〝言葉から地名に迫る〟ことを追及していたならば、たとえ文書はなくとも古代・中世の叙述はもっと豊かになったのではないか。

叙述の方法に就いてもなお工夫の余地があったと思う。いま述べたような事項に就いて記述のある項目もある。だがその場合でも、それは前書きとして記され中世の項とは区分されてしまっている。しかし板碑・館・古道伝承・古寺社、これらは中世の歴史そのものに他ならないのであって、かかるものを組み込んでこそ歴史叙述として生き生きとしたものになったに違いない。

最後に資料編について。『角川日本地名大辞典』が小字一覧を収録しているのは、小字地名が忘れ去られようとしているとき実に貴重な存在である。しかしここでも欲を言うならば、次のような点に配慮した仕事がほしかったと思う。それは現在の「地籍字名簿」にのっている地名は、実をいうと明治時代に大幅に整理された結果なのであって、「名簿」にはのらなかった古くからの小地名が、地元では「俗地名」として伝えられているということがあるからである。そして今、急速に消えつつあるのはこうした「俗地名」なのである。もちろんこれは『角川日本地名大辞典』の他県版にも共通した弱点なのであって、青森県版のみの責任ではない。だがこのような小地名の採録と編纂の作業も、これからの私達の課題となるであろう。地名をめぐってはじめに述べたような事態が進行しつつある現在、その意義は決して小さくないはずである。

三

以上、紹介と言いながらそのじつ勝手な論評を加えてきた。編集者・執筆者に対する非礼は重々お詫びしたい。もとよりこの『青森県地名大辞典』刊行の意義は大きく、わが県地域および日本の北方世界に就いての認識の発展に果たす役割は、計り知れないものがある。それをいくら強調してもしすぎることはないであろう。だがそれとともに、これから私達が果たさねばならない課題もまた大きいのであって、その事の重さを確認して拙い書評を終えたいと思う。

（盛田稔・長谷川成一編、角川書店、一四七八頁、八八〇〇円、菊判
昭和六〇年十二月八日発行）

（弘前大学教育学部助教授）